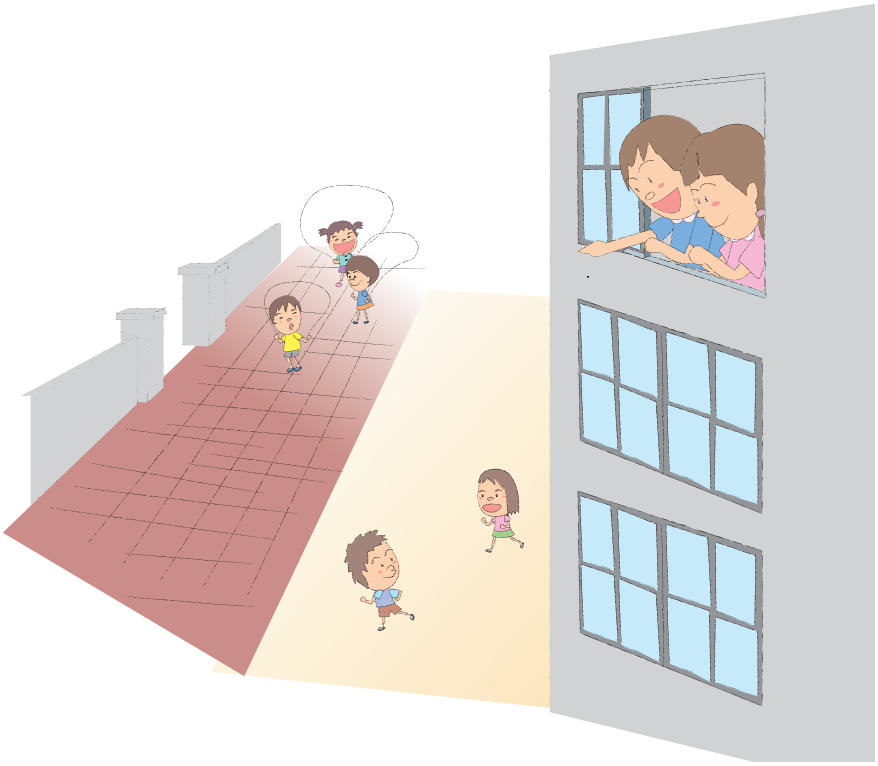
ちょっとだけなら

ぼくの学校では、秋に新しい体育館と校しゃがかんせいする。その工事のために、運動場の広さが、今までの半分になってしまった。正門を入ったところには赤れんががしかれているが、そこは、なわとびをして遊んでもよいことになっている。だが、すべりやすいので、おにごっこはきんしの場所になっている。ぼくたちは、まどから、できあがっていく校しゃの様子をながめながら、かんせいを心まちにしていた。せまくなった運動場では、今までのように、昼休みにドッジボールのコートを取ることができなくなった。今はみんな、おにごっこにむ中になっている。

楽しみにしていたおにごっこが始まった。ぼくは、にげる方になった。さい後までタッチされないように



にげきろうと、なかよしのたけし君と話をした。ぼくは、足の速いけい子さんに見つからないようにしようと、心ひそかに思っていた。

ドッジボールをしている上級生のめいわくにならないように、はしの方を走りぬける。そのうち、思っていたとおり、けい子さんに追いかけられたが、いきを切らしながらにげきった。そのとき、たけし君に声をかけられた。

「赤れんがの方へにげよう。あそこならおにが来ないからつかまらない。」

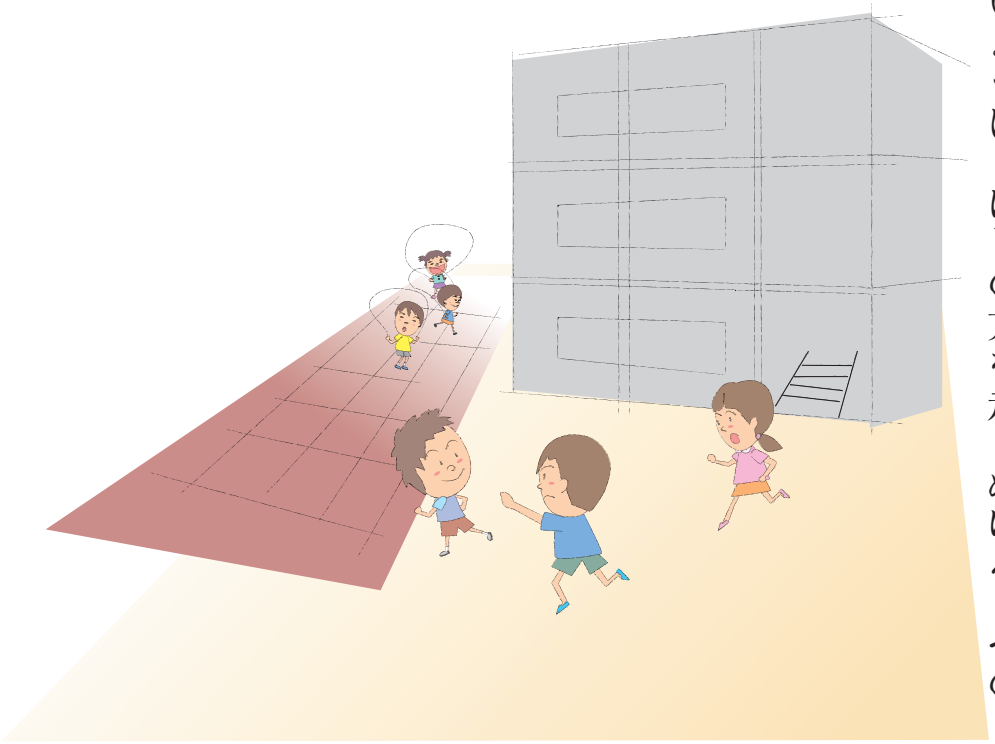
ぼくは、

「赤れんがは、おにごっこきんしだろ。」

と答えた。たけし君が、

「先生には見つからないよ。だいじょうぶだよ。」

「でも、・・・。」

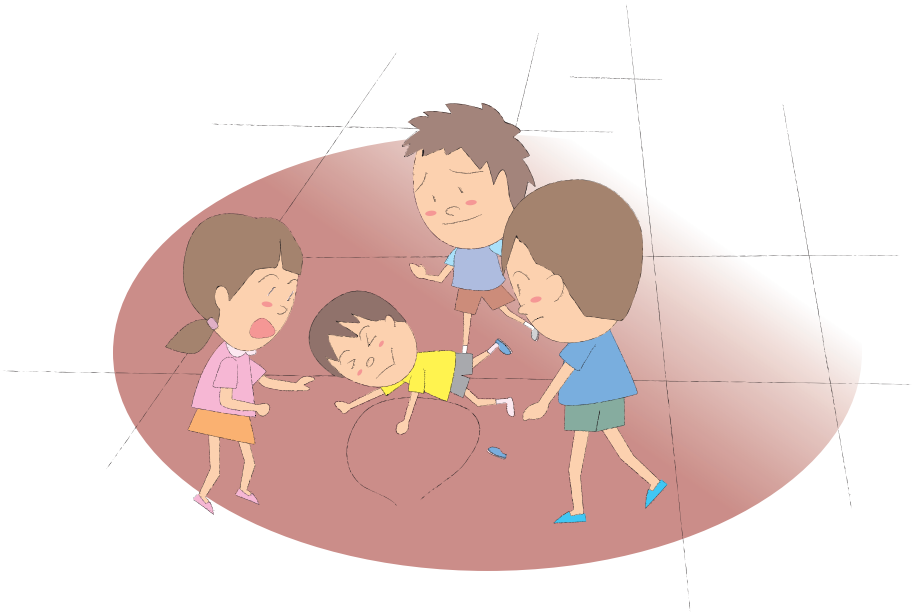


ちょっとだけならいいかなと思い、赤れんがの方に入りこんだ。ぼくたちは、一休みしてから、何もなかったかのように、おにごっこにもどった。

ところが次の日のことだった。けい子さんにおいかけられて、またぼくたちは、赤れんがに走りこんだ。（あぶない。）そう思ったしゅん間、ぼくはすべって、なわとびをしていた二年生とぶつかり、二年生は赤れんがの上にたおれこんだ。

「だいじょうぶ。」

と声をかけながらみんながかけより、顔をのぞきこんだ。



ひざのところがざっくりさけて、血が出ている。ぼくはどきっとした。

「ごめんね。」

と言いながら、ないている二年生をたけし君とほけん室へ連れて行った。

ほけん室の先生が手当てをしながら、

「頭を打たなくてよかったね。頭を打っていたら、もっと大けがになっていたよ。あそこは、おにごっこきんしの場所だったよね。きまりは何のためにあるのかな。」

と言った。ぼくもたけし君も、はっとして、顔を上げて先生の顔を見た。